

東アジアにおける安全保障協力の展望 — アナーキーの下の協力への道程 —

I. 問題

東アジアにおける安全保障協力を実現するためには、どのモデルが適切か？

- 現在、議論されている4つのモデル(①米国の同盟ネットワーク、②民主主義同盟、③ASEANを下敷きにした安全保障協力、④災害救助型安全保障協力)について検討。
- その際、Axelrodの協力に関する研究成果を用いて検討する。¹

II. Axelrodの協力理論

1. 協力理論のおさらい

* 中央の権力の手を借りなくても、条件さえ整えば協調関係がエゴイストの集団の中で出現し得る。
* 友情も当事者間の理解がなくても協力関係が生まれ、安定することは可能。

(1) 協調関係を築くためのつきあい方

- ①羨ましがらないこと (don't be envious) : ゼロ・サムだと考えないこと
- ②上品さ (nice) : まず協調。相手が協調している限り自分からは裏切らない
- ③互惠主義 (reciprocity) : 相手の出方が協調であれ裏切りであれ、その通り相手にお返しすること。相手が裏切って来た時には、怒りを表す可能性を示すこと
- ④心が広いこと (forgiving) : 罰した後は協調。心を広くして長く遺恨を持たないこと
- ⑤相手が自分についていけるように、明快な行動をとること

(2) コンピューターゲーム大会

	協調	裏切り
協調	R=3, R=3	S=0, T=5
裏切り	T=5, S=0	P=1, P=1

表1. 囚人のジレンマ

- ☆ 優勝したゲーム = 「しっぺ返し (TIT-FOR-TAT)」
(最初は協調し、その後は相手の前の回の行動を繰り返す)

¹ Robert Axelrod, *Evolution of Cooperation* (Cambridge, MA: Basic Books, 2006);
R. アクセルロッド『つきあい方の科学』ミネルヴァ書房、2004

(4) 協調関係が進化の3段階

- ① 最初は、まわりが無条件に裏切りを繰り返す中で、協調関係を開始しなくてはならない。協調派が裏切り派の中でちりぢりになり、互いにつきあって助け合う機会がない場合、協調関係の芽は育ち得ない。しかし、たとえ、協調派が少数でも、互いに内輪でつきあう機会に恵まれ、互恵主義 (reciprocity) にもとづいて協調し合うことが出来れば、協調関係は進化し得る。
- ② やがて、互恵主義にもとづく戦略は、他の多くの戦略に競り勝って栄える
- ③ 最後に、互恵主義にもとづく協調関係がひとたび足場を築いてしまうと、協調的でない戦略の侵入を阻止できる。つまり、社会進化の歯車には、逆行止めのツメが付いている。

(5) 協力を生みやすい構造

- ① 見返り制度 (payoff structure) : 見返りが大きい (と認識される) ほど、協力は可能
- ② 未来の影響 (the shadow of the future) : 将来の見返りを現在の見返りに比べて高く評価すればするほど、現時点で裏切る誘因が減少する
- ③ 互恵主義の維持 : (a) 裏切り者の特定 ; (b) 裏切り者に焦点を合わせて報復可能 ; (c) 裏切り者を罰するに見合う長期的な利益がある

III. 東アジアで安全保障協力が実現するとすると…

1. アクセルロードによる協調形成パターン

- (1) 協調関係にある数カ国が核を形成
- (2) 裏切りは罰する (裏切りに対する探知能力・処罰能力)
- (3) 処罰後は、再度、協調 → 協調メンバーに仲間入り?

2. 4つのモデルの検討

- (1) 米国の2国間同盟ネットワーク : 米、日、韓、豪
米国は、近年、「ハブ・アンド・スポークス」型の2国間同盟のネットワーク化を進めている。例えば、日豪防衛・外相閣僚協議 (「2+2」) や日米豪防衛相会談が開かれたほか、米国とタイの合同演習「コブラ・ゴールド」に日本、シンガポール、インドネシアなど計9カ国が参加している。
 - ① 同盟国内では、一定の協調関係 ⇔ 日韓のギクシャク
 - ② 同盟国ネットワークがタイ、シンガポール、インドネシアなどに広がって、スポーク間の協調に繋がるか?
 - ③ 裏切りに対する罰則は、同盟の軍事行動で対処⇒その後、協調的な行動に変えられるのか?
 - ④ ネットワークがそれ以外の国に及ぶかどうかは不明
- 【課題】全体に裏切りに備えた仕組みになっているので、協調的な行動を誘発できるか不明

(2) 民主主義同盟 (マケイン案) : 米日韓豪印

民主主義国同士は、戦争をしない⇒協調関係 (単なる同盟国より強い協調?)

- ①民主主義国同士内では、協調関係
- ②非民主主義国への波及の可能性あり
- ③裏切りに対する罰則は、とくに規定なし⇒同盟機能を用いれば (1) と同じ
- ④罰則の後の協調によって、自発的な民主化が進めば、協調が広まる可能性
- ⑤組織化されていない

【課題】民主主義国であることがメンバーに加える要件。排他的ではないか？
強制的な体制変革が難しいことは、イラク等で実証済み。強制以外の方法で、他国がどのように民主化を促すことができるか？

(3) ASEAN 型

- ①不干渉の原則で、協調関係
- ②ゆるい枠組みなので、他国への波及は容易
- ③裏切りに対する罰則・査察機能は、とくになし

【課題】各ゲーム・過去の事例において協調を促す前提にあるのは、裏切った場合の罰 (互惠主義)。これがないと協調は困難？

(4) 災害救助型

- ①現時点では、まだ多国間の常設組織はなし
- ②援助を必要としている場合に援助・協調⇒協調を促す環境
- ③互惠主義の条件も充足
- ④裏切りに対する罰則は想定されていない

【課題】信頼醸成には有効だが、裏切り (侵攻) 抑止の仕組みに育つことは困難？

IV. 結語

1. 可能性が高いのは、同盟のネットワーク
2. 課題

(1) 米国のハブ機能を軽減できるか？

●つまり、スポーク同士の連繫を強化できるか？

(2) 同盟の方から非同盟国 (中国など) に対して協調的な行動を取れるか？ (協力が生まれるかどうかは、自分の側から協調的な行動に出ることが重要=ナイス)

●つまり、中国に対して、オブザーバーの地位などを日米・米韓同盟の中で与えられるか？

➡ここで、壁となるのは、日本の不安 (insecurity)。

日本において、「見棄てられ (abandonment)」、「米中共同管理 (condominium) に対する警戒感は強い。

(3) 外の脅威 (敵) に対抗するために作られた同盟に潜在的な脅威を加入させて、同盟を維持できるか？